様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 １４ 日現在

機関番号：３２６６３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｋ００００７８

研究課題名（和文）１９６０－７０年代における急進的キリスト教思想の国際比較研究

研究課題名（英文）International Comparative Study of Radical Christian Thought in 1960s-1970s

研究代表者
村山　由美（Murayama, Yumi）

東洋大学・東洋学研究所・客員研究員

研究者番号：７０３６４９６６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：田川建三を中心とする戦後日本の急進的キリスト教思想が、当時の大学紛争を通じてどのように生み出されていったのか、そしてそこに含まれる現代的意義と問題点がどこに見出されるのかを検討した。また、キリスト教をめぐって語られたこれらの思想が、同時代の諸思想とどのような関係にあるのかを考察し、田川らのテクストを戦後思想史の文脈に接続する作業を行うことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の学術的意義は、全共闘運動とキリスト教思想の関係について、新約聖書学者・田川建三、及び、神学者・高尾利数を中心に、思想史的に分析した点にある。学生運動を対象とした研究は数多くあり、宗教との関わりについても、キリスト教系大学における学生運動や、同時期から顕著になった日本基督教団内部の対立についての研究はある程度蓄積がある。しかし、田川や高尾という特定の思想家についてとりあげた研究はまだ少なく、さらに全共闘運動との思想的関わりについて充分に論じている研究はほとんどない。その意味で、戦後史とキリスト教思想の関係をめぐる研究に新たな視点を導入することができたと思われる。

研究成果の概要（英文）：This study examined how the radical Christian thought of postwar Japan, centering on Kenzo Tagawa, was generated through the university conflicts of the time, and where the contemporary significance and problems contained therein can be found. I also examined the relationship between these ideas about Christianity and the various ideas of the same period, and were able to connect the texts of Tagawa et al. to the context of the history of postwar thought.

研究分野：宗教学

キーワード：田川建三　急進的キリスト教　大学紛争

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

従来日本のキリスト教思想が歴史学的に論じられる場合、対象となる思想家は戦前の著名な神学者が多く、帝国主義・天皇制に具現化する国家権力との関わりがいわば古典的なテーマとされてきた。申請者も、帝国主義と聖書解釈の関係について、博士論文、*The Bible in Imperial Japan* (The University of St Andrews, PhD Thesis : https://research-repository.st-andrews.ac.uk/handle/10023/1717) においてあつかって以降、日本のキリスト教思想家に注目して研究をしてきた。しかし、その観点のみからでは、戦後の GHQ 主導の宗教政策において「信教の自由」が保証されたことにより、宗教教団の存続をかけた国家権力との緊張した関係は終わりを告げたかのように語られがちである。そこで、戦後の日本におけるキリスト教思想の展開として、国家権力の問題がかたちをかえて浮上してきた 60 年代、70 年代に焦点をうつし、そこで何が問題になったのか、どのような神学的な課題が認識され、変容がせまられたのかを読み解いていくことを考えた。

1960 年代は、日米安全保障条約制定、靖国国家護持運動からはじまった「靖国神社法案」、管理教育、人間の疎外や差別など、国家権力を考える上での新たな課題があらわれてきた時代である。とくに、1968 年を契機に全国の大学に広がっていく大学闘争をとおして、権力や社会的悪の問題に取り組もうとした学生たちは、キリスト教系大学においても他大学と同様に、各大学の「全学共闘会議（全共闘）」を中心に、国家や資本制に奉仕する権力を徹底的に批判した。そして、大学・学問とはなんであるのか、さらに社会とは、人間とは何者であるのかを、「当事者」の立ち位置から問いなおすことを目指した。時期的には、大学がエリートのみにゆるされた特権的な場所から、中産階級の人々に広く門戸を開いてゆくようになり、それにともなって「学者」や「知識人」の様相も変化した時代である。一言でいえば、全共闘運動で学生たちが批判的にとらえようとしていたのは、個々の大学の具体的な問題の背後にある資本制社会のあり方だったと言うことができる。この問いかけに、キリスト教思想の観点からはどのような応答があったのか。それが「キリスト教批判」にむかうものであったとするならば、キリスト教の何が批判されたのか。また、そうした応答は、日本の文脈に独自のものであったのか、それとも同時代の他国におけるキリスト教思想となんらかの関係性をもつものだったのかという点を明らかにしていきたいと考えた。

２．研究の目的

本研究の目的は、1960 年代から 70 年代の日本で、大学紛争との関わりを通して展開された急進的なキリスト教思想の性格をトランスナショナルな視点から明らかにすることである。とくに、学生側の主張の正当性を支持した結果、大学を去ることになった新約聖書学者の田川建三（1935-）、キリスト教神学者であった高尾利数（1930-2018）らの著作を読み解いていく。その際、個人的背景、二人の思想の違いと相互批判、キリスト教以外の学者・評論家との知的交流が、彼らの思想の形成にどう関わったかを論じる。また、欧米の神学的動向にも詳しかった彼らの思想が、国際的な思想運動の潮流の中でどのように位置づけられるか、同時期の英語圏で問題にされていた世俗化論との関連性の有無を検討し、当時の日本のキリスト教思想独自の課題を明らかにする。

３．研究の方法

同時代の英語圏におけるキリスト教思想の展開を視野に入れつつ、戦後思想史におけるキリスト教思想の特質を見定めていく。

まず田川建三を中心に、60 年代から 70 年代にかけてのキリスト教と政治をめぐる議論を整理する。とりわけ田川と吉本隆明、廣松渉、平田清明らの間で交わされた論争を分析して、各論者との共通点や相違点に着目することで、政治的にラディカルなキリスト教思想を展開した田川の独自性をあきらかにする。

また、田川と高尾利数のマルクス受容の分析を行う。田川建三の宗教批判、政治批判の根底に、マルクスの思想がある。田川は宗教が現実から乖離した観念論として、現実の人間の生のあり方を抱え込もうとしてくることを批判的に指摘する。その批判は、キリスト教だけではなく、教条主義的マルクス主義や「民衆」や「大衆」概念を理想化する知識人にも向けられていった。一方、高尾は欧米のキリスト教とマルクス主義の対話についての著作を紹介し、日本でも展開しようとした。彼らがマルクスをどう理解したかは、思想の理解に欠かすことができない。

４．研究成果

（１）新約聖書学者の田川建三が 1960 年代後半の国際基督教大学での大学紛争に教員の立場から関わり、最終的に大学での職を追われるにいたるプロセスを検討するとともに、その思想的意味を明らかにした。具体的には、当時の田川が編集に携わった雑誌『指』に掲載された論考を中心に分析を行い、彼自身が置かれた状況と、研究対象としての聖書ないしイエスを結びつける「類比」の論理を浮かび上がらせ、思想と行動の緊密なつながりを理解することができた。くわえて、田川が対象としてのイエスを特権化し、彼自身が警戒したはずの思想の観念化や党派性を招き入れる危うさがあることも指摘している。この成果を、論文「田川建三における大学闘争と宗教批判―観念と現実のはざま」として発表した。

（２）日本における急進的キリスト教思想の位置を世界的な視座から探るため、同時代の欧米圏でのキリスト教思想、とくに英国での思想の展開を検討した。とくに、ジョン・ロビンソンの『神への誠実』（1963 年）に注目し、儀礼や戒めを排除した愛ある人間関係にもとづく神との関係を説く神学の潮流が、社会的な世 俗化の進展と密接にかかわるものであることを確認することができた。この成果については、日本宗教学会第 79 回学術大会で「60 年代英国におけるカウンターカルチャーと神学」として発表した。

（３）国際基督教大学（ICU）に所蔵されている、同大の大学紛争にかかわる資料を閲覧し、紛争過程のより正確な把握を試みた。この作業により、ICU の紛争全体における田川建三の位置づけが明確になり、当時の田川の思想の歴史的性格を浮き彫りにすることができた。

（４）田川建三や高尾利数による 1960～70 年代のテクストを、同時代の宗教思想史的文脈のなかに位置づけるべく、同時代に展開していた「民衆宗教」をめぐる研究との比較を試みた。村上重良や安丸良夫らによって推進された民衆宗教の研究は、過去の宗教者の姿を通じて体制への批判や対抗の可能性を探ろうとした点で、田川らの仕事と通底するところがある。それだけでなく、田川のテクストに見られる強い主体へのこだわりは、民衆宗教の教祖たちの生活史に一貫して流れる強力な思想性を抽出しようとした安丸らの姿勢と共鳴するものであった。その一方で、田川による「類比」の思想は、歴史研究をよりアクチュアルなものとしようとする試みとしてユニークなものであったと考えられる。

研究期間全体を通じて、田川建三を中心とする戦後日本の急進的キリスト教思想が、

当時の大学紛争を通じてどのように生み出されていったのか、そしてそこに含まれる現代的意義と問題点がどこに見出されるのかを検討した。また、キリスト教をめぐって語られたこれらの思想が、同時代の諸思想とどのような関係にあるのかを考察し、田川らのテクストを戦後思想史の文脈に接続する作業を行うことができた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 村山由美	４．巻 30
２．論文標題 田川建三における大学闘争と宗教批判：観念と現実のはざま	５．発行年 2020年
３．雑誌名 南山宗教文化研究所所報	６．最初と最後の頁 17-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 村山由美	４．巻 94巻別冊
２．論文標題 六〇年代英国におけるカウンターカルチャーと神学	５．発行年 2020年
３．雑誌名 宗教研究	６．最初と最後の頁 115-116
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 村山由美
２．発表標題 六〇年代英国におけるカウンターカルチャーと神学
３．学会等名 日本宗教学会第79回学術大会
４．発表年 2020年

〔図書〕　計1件

１．著者名 栗田英彦編、すが秀実、川村邦光、斎藤英喜、武田崇元、鎌倉祥太郎、エイヴリ・モロー、村山由 美、塩野谷恭輔	４．発行年 2023年
２．出版社 人文書院	５．総ページ数 -
３．書名 1968年と宗教	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関